
モンスターハンター・シスターズ

五円玉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター・シスターズ

【Nコード】

N7664Z

【作者名】

五円玉

【あらすじ】

ユクモ村在住の若きハンター、コウ。彼は村唯一のハンターとして日夜狩猟に勤しんでいた。……そんなある日、ユクモ村に観光に来た3姉妹の旅人ハンターと出会う。ちょっとした事故から、3姉妹とコウは共に狩猟へ行く事となり…… モンハン舞台にバトルあり、ドラマあり、はたまたラブコメありの短期集中連載なのです！

第1話：VS青熊獣1（前書き）

恐ろしくも、約2年ぶりにモンハンの小説を書く事になりました。

作者の五円玉です。

前回のモンハン小説は奇跡的な程の駄文だったので、新たに心機一転、短期集中連載という形でまたモンハン小説描いてみました。

ちなみに第1話ではヒロインの3姉妹はまだ出てきません。

……では、とりあえず、第1話です。

第1話：VS青熊獣1

俺は、大地を駆けていた。

透き通る川の水是緩やかに流れ、四方八方に生い茂る樹々は赤、黄色を中心に明るく染まり、綺麗なグラデーシヨンの葉のカーテンを作りだす。

舞散る落ち葉は風に乗リ、地面や川にゆっくりと積もっていく。

所々にコケの生えた岩は川の水面から顔を出し、水の流れを不規則に変動させていた。

樹々の向こうに広がるは、断崖絶壁の崖と山。

ここは、山と山の間広がる「溪流」と呼ばれている場所。

風は優しい。

空は蒼く、雲がポツリ、ポツリと点在していた。

まるで秋を感じさせられるような、赤色に色づくこの溪流。

今、この溪流で俺は戦っていた。

……何と？

……熊と。

「あ、ヤベっ、肉持ってくんの忘れた！」

俺は川近くの岩に腰掛け、その腰にぶら下げている「アイテムポーチ」を覗き、落胆した。

……肉がない。

この漢字含めた4文字を見る限り、なんか鍋パーティーとかで肉を買い忘れたちよっとドジな少年的なイメージを彷彿させるかもしれない。

……俺は何を言っているんだ？

しかし、ここは鍋パーティー会場ではない。

野生の凶悪な「モンスター」が数多く生息し、そしてそのモンスターを狩猟する「ハンター」達の狩り場、渓流なのだ。

肉がない……つまり食料がない。

すなわち……腹減り、スタミナの回復手段がない。

凶悪なモンスター達に対して、スタミナがない状態で対峙する事……すなわち危険！

その時、

「グオオオオオオンッ！！」

背後から木霊する、野生の叫び声。

俺は、冷や汗滴る背中に気配を感じ、恐る恐る背後へと振り返る。

そこには……

「グオオオオッ」

「あっ……」

青い毛皮に、鈍い瑠璃に輝く甲殻。

腕にはトゲのついた腕甲。

目はつり上がり、巨大な口には無数の鋭い牙。

……簡単に言うと、青色の凶悪そうな熊。

こいつの名前は「アオアシラ」。

ハチミツ大好き、凶悪な好戦的獣。

……ハンターである俺の、今日のターゲット。

なんだけど。

「……………」

……ぐう。

……お腹空いた。

今俺、スタミナが……

「グオオオオオオッ!!」

ただただ空腹に呆けている俺を見下ろし、アオアシラは咆哮をあげ

……

ブオオンッ!

その強靭かつ堅そうな腕甲付きの腕を振り回してきた。

その際、アオアシラは4足から2足歩行の体勢をとり、その場で一気に立ち上がった。

その大きさ、俺の1・5倍はあるのでは？

「うおおおッ!」

俺は咄嗟にその場から跳び、アオアシラの腕をかわす。

「あ、危なっ！」

そう言いつつも視線はアオアシラに向ける。

ちよつとでも油断したらいけない！

一方のアオアシラは腕を振り回したその勢いで少し前進。

そして攻撃後の僅かな硬直時間。

俺は一気に背中から二対の短剣……「双剣」を抜き放った。

双剣　それはハンターがモンスターを狩る時の武器の1つ。

短剣を両手に持ち、その手数で一気にモンスターを斬りつけ倒す、攻撃特化型武器だ。

それゆえ防御の技が何一つなく、モンスターの攻撃を防ぐ事は出来ない。

モンスターの攻撃は回避するしかないのだ。

「……いくぜっ！」

俺は双剣　この渓流で取れる特産の木や、火山で採掘することの出来る鉱石などをふんだんに使ったシンプルな刀……「真ユクモノ双剣」を構え、一気に斬りに掛かった。

「おおおおおおおッ！」

全身に力を込め、右左と交互に斬撃を放つ。

「グオオオオオオッ！」

アオアシラは斬撃の初撃に反応。

咄嗟に身を引き、勢いをつけて一気に爪を立て掴みにかかる。

が……………

「……………甘いねっ」

俺はそれを身を引く予備動作で察知し、その場から右へ回転回避。

瞬間、アオアシラの腕は1秒前まで俺のいた虚空をかすった。

そしてその一瞬の硬直時間にも、俺は次々に斬撃を叩き込む。

左右、右左からの両手斜め上斬撃、右左、そして回転斬撃。

合計8ヒット。

それはアオアシラの左脇腹に入り、着実にダメージを与える。

「グオオンッ！」

あまりの斬撃にアオアシラは一瞬怯んだ。

俺はその隙を見逃さない。

「一気にいくぜっ、アオアシラッ！」

双剣両方の切っ先をアオアシラに向け、一気に斬りかかる。

そして斬り上げ、左右へと斬撃、そして回転斬撃。

流れるような高速連続攻撃。

これこそ双剣の醍醐味。

「ガオオオオン！」

斬撃の痛みに耐えられなくなったアオアシラは無茶苦茶に腕を振るう。

しかし……

「遅い！」

俺はすぐさま回転回避でアオアシラの攻撃を避け、背後をとる。

アオアシラはその体の大きさ故、咄嗟に振り返る事が出来ない。

そこへ、俺はさらに追撃を仕掛ける。

「うおおおおおおッ！」

しっかりと双剣の柄を握り、様々な角度からの連続斬撃
双剣
特有の技「乱舞」を放った。

双剣の刃はアオアシラの堅い甲殻を貫き、その血しぶきが辺りに散った。

「グオオオオオンッ！」

その時、アオアシラの目が鋭さを増した。

その身体からは殺気が満ち溢れ、先程とは違ってかわったの変貌。

怒り状態。

モンスターだって生き物だ。

嫌な事やうざったい事をされれば怒る。

怒り状態時のほとんどモンスターは、攻撃力や俊敏性が増すといった傾向がある。

怒り時のバカ力、がむしゃら、とにかくそんな感じ。

怒り状態になったモンスターはかなり手強い。

しかし。

「面白い、かかって来いよ熊さんっ！」

俺は双剣を抜刀したままアオアシラに一気に駆けよる。

相手が怒り状態で能力が上がるなら、こっちにも秘策はある。

俺は怒りに身を任せ突進してくるアオアシラに、思いっきり突っ込んでいった。

あれから数時間後。

「ああ……お腹減ったあ……」

俺は溪流から俺の居住している村「ユクモ村」への帰路についていた。

ガーグアという丸い鳥の引く馬車……ならぬ鳥車に揺られ、俺は村へと急ぐ。

ちなみにガーグアは羽はあるが飛べない鳥。

その分脚力は凄く、この通り人を乗せた荷車を楽々引っ張れる程。

「……しっかし」

俺は荷車の後ろに積まれた、アオアシラの素材に目をやる。

どれもこれもが鋭く、堅い。

この素材を使って強い武器や、モンスターの攻撃からハンターの身

体を守る「防具」を作ったりするのだ。

そして俺が身に付けている防具　「ボロスシリーズ」と言う、茶色いゴツゴツした防具は、砂漠や砂原などに生息しているモンスターから取れる素材で作った防具だ。

ボロスシリーズを一通り揃える、と言う事は初心者から中級者になつたばかりのレベルを示す。

ボロスシリーズの大元となっている素材は、「土砂竜」と呼ばれているモンスターから取れるのだが、その土砂竜の強さは先程仕留めたアオアシラの比ではない。

アオアシラは大型モンスターの中でもかなり弱い部類に属し、そのアオアシラから取れる素材で作った防具「アシラシリーズ」なんかは主に初心者が纏う防具だ。

そして土砂竜は中級者レベルのハンターが狩るようなモンスター。

よってその土砂竜から取れる素材で作られたこの防具纏っている俺は、まあ中級者レベルのハンターだって事だ。

分かってくれた？

俺は今回、村の近くの渓流でアオアシラが確認され、なおかつ村に近付いて来ていた事から村人の安全を考慮し、討伐へと向かったのだ。

このアオアシラの素材は……売ってお金にし、生活の足しにでもする予定。

「ふああっ……お腹減ったし、眠い……」

暖かな日差し。
程よい疲れ。

俺はガーグアに繋がれた手綱をしっかりと握り、睡魔と戦いながら
ユクモ村へと向かうのであった。

第1話：VS青熊獣1（後書き）

多分第3話辺りまではモンハン未経験者のために、説明文が多くな
ると思います。

うん、しょうがないよね。

第2話：VS青熊獣2

ユクモ村。

溪流の近くに佇む、小さな村だ。

村には今、大量の紅葉が程よい色づきで、村一面真っ赤な状態だ。

村の家や建物はほとんど木造、土壁。

屋根などは紅葉の如くの赤色が多い。

他の大陸で言う、中華みたいな雰囲気个村だ。

ユクモ村は温泉の名所として知られている。

溪流付近の土地は温泉の出が良いらしく、このユクモ村の収入の大部分は温泉などの観光から成り立っていた。

もちろん天然温泉。

その効力は多岐にわたる。

村中硫黄の匂いプンプン。

……まあしかし、ユクモ村は溪流を登ったさらに上にある。

すなわち、山奥。

そのためここに来る観光客はよっぽどの温泉好きか、溪流で狩りをする流浪ハンターの付き添いなどが数日停泊する程度のもの。

そのため観光客は少なく、実のところ村の財政は赤字^{ししじ}。

しかも若者は次々に都会に出て行ってしまい、村人の高齢化も進んでいる。

申し遅れた。

俺の名前はコウ。

このユクモ村で生まれ、このユクモ村で育ってきたハンターだ。

今年で18歳。

このユクモ村唯一の定住ハンターだ。

先に言っておくと、ハンターには戦闘スタイルや武器による職種分けなんかもあるけど、基本的には3つのパターンのどれかに当てはまる。

村や町なんかには家を構え在住し、その村や町を拠点に狩りを行う在住型ハンター。

拠点を置かず、あちこちを旅しながら各地で狩りを行う流浪ハンター

！。

そして、「ギルド」と呼ばれる組織に加入し、軍のように事務的な狩りを行うギルドナイトハンター！。

基本ハンターは、ギルドにてハンターとして公認されないと狩りなどをしてはならない。

モンスターの素材の密輸や、モンスターの狩り過ぎによる絶滅を防ぐためだ。

そしてギルドにて公認されたハンターは、村につくなり旅に出るなり自由。

まあ、ギルドナイトになるには他にさらに特別な試験なんかもあるみたいだけど……詳しくは分からん。

とにかく、俺は唯一のユクモ村在住ハンターなのだ。

「……………ん？」

溪流にてアオアシラ狩りをした翌日の朝。

朝の空気は澄んでいて、呼吸が肺に響く。
まだ朝日の位置は低い。

普段はまだ寝ている時間だが、外からの物音によって目覚めた。

ちなみに俺は1人暮らし。

家の位置はユクモ村のギルド支店のすぐそば。

ユクモ村ギルド支店が村の北側の高台にあるので、まあその辺り。

両親は元々村育ちの在住ハンターだったが、父親はギルドナイトに加入し今は都会。

母親はハンターを引退し、今は父親と共に都会で暮らしている。

回りから見たら、息子だけ田舎の村に置いていかれたかのように見えるよね。

けど実際は、両親に俺の実力が認められ、これなら故郷の村を任せられるという、そんな感じの意味なのだ。

俺の実力を信じ、村在住ハンターだった両親は村の事を俺に託し、ギルドナイトとして都会へと出て行ったのだ。

だから、俺としては別に苦ではない。

村の人達はみんな優しいし、親切だし。

ただ、今村在住ハンターは俺ただ1人。

すなわち、村をモンスターから守る戦力が1人しかない事になる。

ユクモ村近くの溪流なんかでモンスターが大量発生なんかすると、全部に手が回らなくて結構大変。

なので正直、もうあと数人この村にもハンターが欲しい。

それが現状。

「……………ようこそ」

話を戻す。

まだ朝早くのユクモ村。

こんな時間に起きているのは農業関係の人が、宿の従業員か。

しかし、外から微かに聞こえるその声は、女性の声。

この声……………多分村長だろうか。

人間誕生の遙か前からこの大陸に住まう「竜人族」の女性で、まったりした人だ。

「……………誰かと話しているのか？」

俺は部屋の布団に入ったまま、外へと聞き耳を立てる。

「……わざわざ遠い所から、よくおいでになられて」

「いえ、こつちも半分は温泉目当てですし」

……村長の話し相手は、声的に女性？

ソプラノの通った、透き通るような声だ。

「それに、観光なんかも目当てでねえ」

……あれ？

今度はさっきとは違う、何かスローテンポな声？

「あたしは狩り！ そのために来たんだもん！」

は？

今度はまだ幼さの残る、けど元気そうな声？

「まあまあ、3人共に元気がよろしくて」

これは村長の声。

どうやら、3人程の観光客が来たらしい。

なんだ、観光客か……と、俺は気を抜き、まだ朝早かったので二度寝の体勢に入った。

そしてすぐに、また眠りへと入っていった。

第2話：VS青熊獣2（後書き）

バトル描写がかなりのスピード展開。

それが五円玉流。

あ、決して描くのがメンドイとか、そう言うのじゃなくて……うん。

第3話：VS狗竜1

「でえいやあああつ!!」

雲一つない空の下。

その日も俺は溪流にて狩り狩り。

真ユクモノ双剣の柄をしっかりと握り、ひたすらにモンスターと戦っていた。

「グアオオオオオつ!!」

ちなみに今日の相手はドスジャギイ。

薄い紫色の鱗に皮、頭には立派なエリマキ。

後ろ足での二足歩行、前足は後ろに比べて小さく、胸の前で揃えられている。

口には無数の牙。

肉食トカゲみたいな風貌のドスジャギイ。

ドスジャギイは同じ種の小型肉食モンスター、ジャギイを数頭つれ俺を取り囲み、ピョンピョン跳ねていた。

「……………囲むなよ」

俺の周りにはドスジャギイ一匹、ジャギイ三匹。

さっさと片付けて、家に帰って寝たい……。

「グオオツオツオツオツ!!」

その時、ドスジャギイがひとときわ目立つ鳴き声を放った。

そして、ジャギイ三匹が一斉に飛び掛かってきた。

「……来るかつ!!」

俺はまず始めに目の前のジャギイに狙いを定める。

飛び掛かってくるジャギイの動きは単調だ。

咄嗟にジャギイの着地地点を計算し、その場から離れる。

そして数瞬の後、見事に着地したジャギイにすぐさま刃を向けた。

「うおおおおおつ!!」

右と左の回転斬撃、そして切り上げ。

その3回の斬撃でジャギイは吹っ飛んだ。

と、同時に後ろからもジャギイが接近してきたのを確認。

その場から咄嗟に回転回避、そして後ろに着地したジャギイを視界に捉え、切っ先をジャギイの喉元に向け双突きを放った。

「グアツ!!?」

突然の事に悲鳴をあげるジャギイ。

生憎モンスターに同情していたら狩猟なんて出来ない。

俺はそのままジャギイの喉元を斬っ裂いた。

その瞬間、真っ赤に染まる双剣。

「ゲギヤアッ！」

そして最後、三匹目のジャギイが正面から突撃。

俺は右へ跳躍。

そのまま刃を突きだし、真横にいるジャギイの腹へ強烈な斬撃を放つ。

右足に力を入れ、腕にもありったけの力を入れ、そして一気に斬り裂いた。

「…………ふう」

俺の周りには三匹のジャギイの屍。

目の前には、こちらに威嚇行動とばかりに低く鳴くドスジャギイ。

「……行くぞっ」

俺は呼吸を整え、一気にドスジャギイへ接近。

「グオオオオオオオッ！」

一方のドスジャギイは姿勢を低く構え、身体側面をこちらに向ける。

あれは……

「体当たりかつ！」

俺はすぐさま攻撃を中断し、横へ跳んだ。

刹那、先程まで俺がいた場所に放たれた、強烈な体当たり。

「あ……危ねっ！」

例えばボロス装備の俺が初級レベルの大型モンスター、ドスジャギイの体当たりを食らっても、即死レベルのダメージを食らう事はない。

だが、それでも痛いものは痛い。

極力食らいたくはないものだ。

「グオオオッオッオッ！」

ドスジャギイの咆哮が辺りに木霊する。

「……なめられてるな、俺」

俺は改めて双剣を構え直し、ドスジャギイをしっかりと視界に捉える。

背中を汗が伝う感覚。

自然と心臓の鼓動が早まる。

呼吸が荒くなる。

空気を吸い込む度に、肺がゆっくりと軋む。

……これが狩猟だ。

……この感覚こそ、ハンターだからこそこの感覚だ。

「グオオオオオアアアッ！！」

その瞬間、ドスジャギイはその太い尻尾を鞭のように回転させ、強力な回転体当たりを放ってきた。

俺は後ろへ跳躍し、虚空を斬る体当たりが収まったのを確認し、一気にドスジャギイへと斬りに掛かった。

そして、時はきた。

「ふう……まだ倒れないのか」

目の前にいるのは、全身傷だらけのドスジャギィ。

その立派なエリマキは破壊され、ぼろぼろになったエリマキには、もうその風格はない。

身体は呼吸の度に激しく上下し、その口元からは唾液が滴り落ちていた。

かくいう俺も傷だらけではないが、呼吸は荒く疲労困憊。

そろそろ決着をつけないと、スタミナがヤバい。

「……………行くぞっ!」

俺はぐっと双剣を持ち直し、ドスジャギィに向かって斬りに掛かっ

た。

その場から前方へ跳躍し、両刃をドスジャギィへ垂直に叩き込む。

「グオオツ！？」

こちらの素早い攻撃に反応の遅れたドスジャギィ。

その一瞬の隙を俺は見逃さない。

ドスジャギィの腹に乱舞を繰り返す。

「うおおおおおっ！！」

全方位からの、霧雨のような斬撃。

その1撃1撃がしっかりとドスジャギィの身体を捉え、そして確実にダメージを与える。

流れる斬撃。

それは、まるで舞いの如く。

「グオオオオオオオオオツ！」

「…………ツ！？」

その時、今までで一番の咆哮をあげたドスジャギィ。

瞬間、ドスジャギィの口が俺の目前にまで接近。

噛みつき攻撃。

無数の牙が目の前に。

「うおっ!？」

俺は咄嗟の事に一瞬反応が遅れ、ドスジャギイの牙が右腕をかすった。

「ひいっ！」

さすがにヤバかった！

ボロス装備の防御力万歳！

幸い、装備に多少の傷が出来た程度で済んだ。

「くそっ」

俺は一瞬の恐怖を振り払い、目前のドスジャギイの頭目掛けて再び刃を刺す。

「グオオオオオ！」

ドスジャギイの悲鳴。

溪流に木霊したその声に、狩猟開始当時の覇気はなかった。

「もらったッ！」

俺はそのまま乱舞へ持っていく。

風を切る音。

肉を切る音。

そして、俺の叫び声。

「うおおおおおおおっ!!」

腕にありつたけの力を込め、一気に斬り裂いた。

「グアオオオっ!!」

しかし、ドスジャギイは倒れない。

斬られながらも、ドスジャギイは両足に力を入れ、またしても体当たりの構え。

「……まだなのかつ!!」

仕方なしに双剣を一旦納め、後方へ引く俺。

今の状況で体当たりは食らいたくない。

ドスジャギイは全身に力を込め、バネのように身体を向け、飛び掛かってきた。

ヒュンッ!

刹那、虚空に叩く体当たり。

そして体当たり後の僅かな硬直時間。

俺は双剣を構え、再び乱舞。

「うおおおおおっ!!」

これで決める!

そして……

「はぁ……はぁ……あー、しんどっ!」

見事、俺はドスジャギイの素材をたんまりと持ち、村への帰路につ

いたのだった。

第3話：VS狗竜1（後書き）

もう3話なのにヒロインが登場していない事実。

次回は出ます、いや出します（汗）！

むさ苦しい狩りシーンばかりだと、描いてる方もツライから……。

なので……うん、もうちょっとお付き合い下さいな！

第4話：VS狗竜2

「お疲れ様です、コウさん」

ドスジャギイの狩猟を終え、俺はユクモ村に戻ってきていた。

……もう疲労困憊の俺。

足はガタガタ、息はぜえぜえ。

あ、決して変態さんではないよ俺!?

そして、村に着いた事による安心感大。

村には入口に木製の大きな門がある。

これこそ、外にいる凶悪なモンスターから村を守る要。

この門があるからこそ、村はモンスターから守られ、村人は平和な生活を送る事が出来るのだ。

そして、村入口の門をくぐり、長い石畳の階段を上がり、ギルド前の広場にて村長に狩猟の報告。

「今回の狩りはいかがでした？」

村長は竜人族の女性だ。

その黒髪は上でゆってあり、細目に尖った耳。

ゆつたりとした藤色の着物を着た、おしとやかそうな女性。

「いやあ……今回のドスジャギイ、めちゃくちゃデカかったですよ。どんだけ斬っても倒れないし」

俺は防具のヘルムを脱ぎつつ、アイテムポーチ内の狗竜ドスジャギイの鱗を取り出す。

そしてそれを村長に見せた。

「これはまあ……大きな鱗ですね」

村長の眉がヒクツツと動き、若干ながら目を見開いた村長。

「コウさん、さぞかし苦労したことでしょう?」

「いえ、前みたいに食料忘れた訳でもありませんし……まあ疲れたのは疲れたけど」

朝、この村を出発し、今はもう夕方。

長い時間狩りしていたんだなと実感。

「ふふっ、そう言えば前回、食料を忘れて行かれたんですって」
ふと、思い出したかのように微笑む村長。

「そうです……あの時は本当に悲惨だった……」

肉の有り難さを改めて実感したなあ。

「大変でしたね。あ、コウさんこれ、今回の報酬です」

そう言っつて、着物の袖口から袋を取りだし、今回の狩りの報酬……ゼニー（金）を渡してきた村長。

「ああ、ありがとうございます」

俺は狗竜の鱗をアイテムポーチにしまい、ゼニーを受け取る。

今回の依頼は村周辺の溪流に出没していたジャギイの群れの討伐。

溪流特産のタケノコ狩りに来ていた老人がジャギイの群れに襲われた事がきっかけで、ジャギイの大量発生が発覚。

村人への被害を恐れ、村長が俺に依頼してきたのだ。

「お礼を言うのはこちらの方です。コウさんが頑張ってくれてるからこそ、このユクモ村は安泰を保っているのです」

そして村長はにっこりと微笑んだ。

「村人を代表して言わせてもらいます。コウさん、いつもいつも本当にありがとうございますね」

面として言われるとちょっと恥ずかしいな。

「いえ……俺、ハンターですから！」

俺は視線をそらし、ギルド内にある天然温泉へと向かう。

「じゃ、じゃあ俺疲れたので、ちょっと温泉行ってきます」

「ああ、はい。行ってらっしゃい」

村長は俺に向かい軽く手を振った。

俺も軽く手を振り、すぐそばのギルドの建物へと足を運んだ。

ユクモ村ギルド。

ここはギルド本部からの狩猟依頼 「クエスト」を受注する場所だ。

建物内に入った左手に巨大なカウンターがあり、ギルドマネージャー達がいつでもクエストを受注出来るよう待機してくれている。

建物内の構造としては、無駄な柱を取っ払ったような、開放的な造り。

照明は橙色に染まり、とても暖かな雰囲気だ。

床は石畳がそのままに、壁は木目が目立つ板造り。

天井は結構高く、骨組みは木と竹だ。

そしてギルド内の右側。

そこは村人が自由に利用出来る巨大な露天風呂が設置されている。

効力は体力増強などという不思議な風呂だ。

まあ実際、入ってみると心なしか元気にはなるが。

ちなみに露天風呂は1つしかなく、混浴だ。

露天風呂は石造りで、お湯は自然に湧き出たものを猫型の二足歩行モンスター「アイルー」を模した石像から出るよう設計されていた。

そしてそのアイルーが、この露天風呂の番台でもあり、温泉内にあるドリンク売りをしていたりする。

アイルーはモンスターの中でも人間との文化の干渉が進んでいて、中には人間の言葉を理解し、話す事が出来るアイルーもいる。

そういつたアイルーはハンターと共に狩りへと向かう「オトモアイルー」となったり、ハンターを料理でサポートする「キッチンアイルー」として活躍したりするのだ。

また人間の中には、アイルーの可愛さに見いられペットみたいに扱ったりする人もいるらしい。

まあアイルーの身長は人間の腰程度のモノで、しかも愛くるしい猫顔ときている。

……モフモフはしたくなるさ。

「お、コウの旦那ニヤ！ いらっしやいニヤ！」

温泉の入口。

そこにはいつも通りに番台に座るアイルが一匹。

「おっす。今日も風呂に入りに来た」

俺は番台アイルに挨拶。

「そうかニヤ。じゃあこれ、タオルと桶ニヤ」

そう言って差し出してきたタオルと桶を俺は受け取る。

「おっおっ、いつも仕事ご苦労さん」

番台アイルはこうした入浴者へのサービスの他にも、温泉に係るようなクエストの受注等も請け負っている。

なので、仕事内容は多岐にわたり、大変そうだ。

「いやいや、コウの旦那こそハンター業お疲れ様なのニヤ！」

番台の座布団に座り、ヒゲをピンと伸ばす番台アイル。

「……じゃあお互いお疲れって事で。じゃ、ひとつ風呂行ってくるわ」

そう言って、露天風呂の端にある簡素な更衣室へと向かう。

ちなみに入浴代は無料。

ありがたや、ありがたや……。

「行ってらっしゃいなのにヤ……あっ！」

その時、何かに気付いたような声を出した番台アイルー。

もう俺は男性用更衣室入口の暖簾をくぐりかけていた。

「コウの旦那あ、今日は先客がいる……」

「え？ 何？」

何かよく聞き取れないな……。

番台アイルーは何を言っているんだ？

……その時だった。

男性用更衣室のすぐ隣にある、女性用更衣室。

お互いに入口が向かい合うようになっていて、入口にはそれぞれ赤

と青の暖簾が掛けてあった。

そして、俺が男性用更衣室に入ろうとした、その時。

バサッ……

「ちよっ、止めてよりユナ……えっ？」

「……あっ」

ドカツ！！

……その時、女性用更衣室の暖簾を物凄い勢いで突破してきた何かに、思いつきりぶつかった。

物凄い衝撃。

「くはっ……」

俺は勢い余って床にぶっ倒れた。

そして腰強打。

「いつっ！」

……で、俺は腰を擦りながらゆっくりと起き上がる。

「……痛っ！ な、何だ今の……っ！？」

俺はぶつかった何かを確かめようと、視線を前に。

そこには、俺同様に床に倒れている少女の姿があった。

……何、コイツが女性用更衣室からすっ飛んできたモノの正体か？

ってか、え……？

「痛つつう……へ？」

少女も今の衝撃で腰を打つたらしく、腰を擦りながら起き上がる。

……少女は風呂上がりか何なのか……。

その……うん、まあ。

すっ裸だった。

「……………っ！」

少女は、多分俺と同じくらいの歳だろうか。

黒髪を後ろでポニーテールにまとめ、やはり風呂上がりらしく艶がある。

綺麗ってよりかは、可愛いらしい顔

目は大きく、その他パーツも整っている。

ここでも風呂上がりのせいか、頬は若干赤い。

肌にも艶があり、みずみずしい。

身体のラインも無駄肉の影もなく、スリムだ。

そして、ここからだと言えぬ胸には、そこそこの大きさが。

「……ひっ！」

多分俺はその美しい身体に見とれていたのであろう。

気付いたら、少女の顔は真っ赤に染まり、頭からは湯気が。

……あ、マズいなこのシチュエーション！

「……あ、あのー」

俺はとにかく言葉を話す。

本能的にそうなっちゃう。

その間にも、少女は身体中真っ赤になっていき……

「き、君！ とても可愛いね（キラリっ）」

ドスッ！

「がはっ……」

鳩尾にグーが飛んできた。

第4話：VS狗竜2（後書き）

ラッキースケベは主人公の特権です。

どっかの変態主人公やオタク主人公が何て喚こつが知ったこつちや
ありません。

第5話：VS狗竜3

「この子達はね、ユクモ村へ観光に来た旅人ハンターさん達なの」
ゆったりと喋るその村長の言葉を、俺は先ほど大打撃を受けた腹を
擦りながら聞いていた。

「…………観光旅人ハンター？」

現在俺がいるのはギルド内の竹製のベンチ。

目の前には村長と、3人の女性。

全員見た目若い。

…………先ほど俺は重大事故を起こし、鳩尾にグーをもらった後に相手の
少女が大きな悲鳴をあげた。

その悲鳴を聞いた村長がこうしてギルドにやって来て、なおかつ女
性更衣室からは更に2人の女の子（あ、もちろん服は着てたよ）が
出てきて。

そして今、村長から説明を受けている所。

「えーっと、私達は全員姉妹で、旅しながらハンター業をしている、観光大好きハンターなんです！」

そう言ったのは3人の中で1番身長の高い女性。

身長の高いと言っても、せいぜい165センチくらいだろうか？

細い身体に色白の肌。

ウェーブのかかった色素の薄い茶色髪。

整った輪郭、そして穏やかそうな暖かい瞳。

何となくぼわぼわした人だな……。

「私は長女のリフィア、弓使いね！ よろしくねコウさん」

にっこりした暖かい笑顔。

俺はおずおずと頭を軽く下げ、自己紹介。

「多分村長から聞いてると思うけど、ユクモ村の在住ハンター、コウです。よろしくお願いします」

すると、3人のうち真ん中にいる少女が少したじろぐ。

……彼女はさつき更衣室から飛び出し、俺と事故った張本人だ。

「……………ほら、ソフラちゃんも挨拶挨拶！」

リフィアさんに言われ、何かめちゃくちゃ動揺しだした事故少女……もといソフラさん。

視線を反らしながらも、口を開く。

「……えっと、次女ソフラです。歳は18、使う武器は太刀……」
ぶっきらぼうに自己紹介するソフラさん。

……つてか、

「18つて、俺と同じ年か」

俺のその言葉に、ソフラさんの黒髪がピクッと反応。

「……わ、私はあなたを許しませんからっ！ 例え同じ年であろうと」

顔を真っ赤に染め、敵意むき出しのソフラさん。

ここは素直に謝るべきだな。

「いや、さっきのはマジで悪かった！ 本当にゴメン！」

とりあえず誠心誠意を尽くして謝る。

例え事故であろうとも、こっつい場合は男が謝らないといけないのだ。

「…………ふんっ」

…………俺の誠心誠意虚しく、ソフラさんはそっぽを向いてしまった。

「…………ごめんねコウさん。ソフラちゃん、昔から男の子とは仲良くなれない性格でね」

咄嗟のフォローか、リフィアさんが間髪入れずに謝ってくる。その顔は苦笑いだ。

「い、いえ！ こちらにも非はありますし！」

何だか恐縮してしまう。

「わ、私は別に男の人と仲良くなるうとは考えてもないわっ！ ただ男つてのが嫌いなだけよっ！」

ちょっと大きめの声で半ば威嚇してくるソフラさん。

男嫌いか…………

そしてツンツンしているソフラさんをリフィアさんが宥めている間に、最後の1人が自己紹介。

「あたし、三女のリュナって言います。ガンランサーです！ よろしくお願ひしますねコウさん！」

「あ、ああ。よろしくリュナさん」

藍色に近いショートヘアに、ちょっと小柄な体型。

この3姉妹全員に共通する事で、みんな身体のラインが細いのだ。
ハンターは皆、凶悪なモンスターと戦うために己の肉体をムキムキにしたり、ウェイトを持たせる事により力をするのだ。

基本重い武器を振り回し、モンスターを狩猟するハンターにとって、筋肉がない、ウェイトがないってのはある意味致命的なのだ……

「さん付けは止めてくださいよ！ コウさんの方が歳上なんですから！」

ソフラとは違い、屈託のない笑みで接してきてくれるリユナさん……
……もといリユナ。

うわぁ……接しやすっ！

「あ、ああ。じゃあよろしくな……リユナ」

「はい！」

ええ子や。

そして俺は彼女達と別れて、家路につく。

あの3姉妹もしばらくはユクモ村に滞在するとか言っていた。

……おっとりしてて、どこか暖かい長女、リフィアさん。

……真面目で男嫌いなツンツン次女、ソフラさん。

……明るいくて元気のいい三女、リュナ。

また凄い人達がこんな田舎の村に来たものだな。

第5話・VS狗竜3（後書き）

次回からストーリー本格的始動です。

前ふりに5話……っていつのは今さらながらに長過ぎたかな？

第6話：VS大猪1

「ブヒっ!」

「……は?」

翌日。

俺は村唯一の雑貨屋に、狩猟の道具を買いにやって来ていた。

ユクモ村の外門からギルドまでをつなぐメインストリート。
そのメインストリート上に雑貨屋はあった。

一応、ギルド内にも雑貨の店はある。

だが、雑貨屋は田舎だからと言って品揃えが悪いわけでもなく、俺は馴染みという事でこの店を結構利用していた。

「あらコウさん、何か買い物ですか?」

店の店主はまだ若い女性だ。

本心なのか営業用なのかは分からない、にっこりとしたスマイル。

「ああ、ちょっと砥石をきらしてな……」

と、言いつつ俺の視線は雑貨屋の隣、村近くの農場へと続く道の上。

……そこには、豚がいた。

ピンク色の小さな豚。

つぶらな瞳、くるくるのしっぽ。

……この豚の名前はプーギー。

俺がまだ小さい頃からこの村にいるマスコットの豚だ。

……ここまではいい。

いつもプーギーは気まぐれに村を散策し、昼寝したり村の子供と遊んだりしている。

で、今そのプーギーが隣の道路上にいて。

「ブヒっ!」

「か……可愛い……っ!」

ゴロンと仰向けになっているプーギーの腹をわしゃわしゃ撫でている人が。

「ブヒっブヒィ!」

「きゃあっ、手足短いつ!」

プーギーがちょっと動く度にその人は大興奮。

……。

「ねえコウさん」

雑貨屋の店主が俺に話し掛けてくる。

「あの子、最近観光に来たって言うハンターさんかな？」

「……多分ね」

苦笑気味の店主の問いになあなあで答える。

「ブヒヒヒっ！」

「うわっ、鼻息荒いつ！」

プーギーと遊んで、楽しそうに笑ってるな……ソフラさん。

ソフラさんが今着てるのは多分私服だろう。

白を基調としたふりふり付きのシャツに淡い緑色のプリーツスカート。

めっちゃラフなスタイルのソフラさんは、黒髪のポニーテールをゆらゆら揺らしながらプーギーと戯れていた。

「ブヒヒっ！」

「……やっぱり可愛いっ！」

愛くるしい笑顔でプーギーをなで回すソフラさん。

プーギーもまんざらではない様子。

……何だろう、なんか和む。

その時。

「もおっ、お持ち帰りしたい……ん？」

たまたまこっち向いたソフラさんと、

目があつた。

「あ

思わず俺、フリーズ。

ソフラさんもフリーズ。

雑貨屋の店主、苦笑い。

……とりあえず、何か言わないと。

「……ぶ、プーギーって言うんだ、そいつの名前」

すると、みるみる顔が真っ赤になっていくソフラさん。

目をぱちくりさせ、頭からは蒸気を吹き。

「……か、可愛いよな。愛でたくなるよな」

俺、同情してみる。

ソフラさん、もう真っ赤。

何か可愛い。

「……お持ち帰り、したくなるよな」

もう限界だった。

「……っ！」

……ソフラさんが。

俺の一瞬の間をつき、その場で立ち上がり、俺の真横を猛スピードで駆けていった。

その速さ、下手したら大猪ドスファンゴ以上のスピード。

とにかく、速かった。

「……コウさん」

何故か罪悪感が漂っているこの場に、店の店主が一言。

「……砥石、いくつご購入ですか？」

「……………あ、コウさん！」

その日の午後。

俺は温泉に入り、ギルドまで来ていた。

「リフィアさん？」

そして、ギルドの入り口の所でリフィアさんとばったり遭遇。

「奇遇ですね！」

リフィアさんにはにっこり笑顔。

「そうですね……………って、え？」

俺はリフィアさんのスタイルを見て驚く。

今、リフィアさんは狩猟の際に使う防具を身に纏っているのだ。

「リフィアさん、これから狩りですか？」

時間帯は夕暮れ。

ハンターは昼夜問わず狩猟には出かけるが、基本狩猟は昼に行く。

「はい。ちょっと溪流の方にある特産のタケノコを取りに！」

太陽のように暖かなりフィアさんの笑顔。

「特産タケノコ？」

ユクモ村周辺の溪流は竹の産地。

溪流には木と竹が同じくらい生えてる程。

そのため、タケノコも多く生殖しており、ユクモ村の郷土料理としてタケノコご飯なんかがある。

タケノコはユクモ村の名産品なのだ。

「はい。私、結構なグルメ好きで、是非このユクモ村名物のタケノコ料理を食べてみたいなあって！」

相変わらずの笑顔で答えるリフィアさん。

タケノコ料理か……

「……だったら、別に採集にいかなくても、定食屋に行けばタケノコ料理くらい……」

なにも今から採集に行かなくても……。

すると、リフィアさんの笑顔が苦笑に変わる。

「いえ、定食屋さんには行っただんですけど、タケノコが今切れてるみたいで……」

定食屋……村の名産品を切らすなよ……

「で、何とかして村にいる間には食べておきたいなあって……」

「そうだったんですか……」

何故か瞳が燃えているリフィアさん。

……そして俺の視線は、そんな彼女の防具に向けられていた。

……赤を基調とした、鎧のような防具。

それは、空の王者と呼ばれる飛竜の代表的モンスター、火竜から取れる甲殻や鱗等から精製される、威圧感溢れる防具だ。

確か、名前は『レウスシリーズ』

レウスシリーズの元となる火竜は、俺の防具ボロスシリーズの元となる土砂竜とは比べ物にならない強さを持つ。

火竜はそれこそ上級者のハンターでしか狩れない、なかりの強敵モンスター。

その防具を装備しているリフィアさんは、間違いなく俺より強い上

級者ハンターだ。

そして、リフィアさんの装備している武器。

それは赤の火竜と対をなす、緑色の雌火竜から取れる素材で作られた弓『クイーンブラスター』

弓の先端にあるピンを設置する場所。

ここに毒ピンを設置する事によって、その毒の効果を高める能力がある。

また、雌火竜も土砂竜と比べて上のモンスター！

つまり、この人めちやくちや強い！

「とりあえず、まずは溪流に行ってみます。そこから竹林を探せばタケノコもきつとあるはずですよし！」

やる気まんまんのリフィアさん。

拳を胸の前でグッと握り、瞳はキラキラ。

かなりの食通だな。

見た目はかなりの細身なのに。

……と、ここで俺はある事を思い出す。

「あ、あのリフィアさん」

「ん？」

「……特産タケノコは、渓流の中でも崖っぷちって言うか、高い所にしか生息していないんですね」

そうなのだ。

普通のタケノコと特産タケノコの違い。
それは生息地。

特産タケノコは高い場所にしか生息しない。

「高い場所？」

「はい。渓流で言うエリア3辺り……って言っても分からないか」

渓流に限らず、狩猟場はそのほとんどが広大なため、フィールドをエリア区分している場合が多い。

渓流の場合、フィールドは全部で9のエリアに分かれている。

「高い場所……高い場所……？」

リフィアの頭にはハテナマークが浮かび始めていた。

「……リフィアさん」

何か混乱し始めたリフィアさんに助け船を出す。

「よかったら、俺が取って来ましょうか？」

「えっ？」

俺は空を見る。

……まだ日は沈んでいない。

「多分リフィアさんじゃ場所分らないだろうし、どうせ俺も暇ですし」

「いや、それじゃコウさんに面倒を……」

おろおろしながら、申し訳なさそうな顔をするリフィアさん。色素の薄いウェーブがかつた髪がわさわさと揺れる。

「別に大丈夫ですよ。俺もタケノコ食べたいし」

「でも……」

「いや本当に大丈夫ですよ。溪流なんてすぐそこですから」

そう言っつて俺は自宅へ防具を取りに。

「夜8時くらいまでには帰りますから、それまでは……」

「あ、あのっ！」

その時、リフィアさんが少しもじもじ。

「あ、その……だったら、私達も連れていってもらえませんか？」

「……え？」

第6話：VS大猪1（後書き）

これが今年最後の更新になります。

今までありがとうございました！

また来年も頑張りますので、よろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7664z/>

モンスターハンター・シスターズ

2011年12月31日01時46分発行